

今回の写真展はフォトジャーナリスト伊藤孝司氏が世界を駆け巡り撮影した貴重な芸術作品です。伊藤氏の特別なご配慮により企画することができました。写真は全て額に入れていただきますので丁重に扱って下さい。

1.内容

- 現在、完成された写真パネルは23枚です。(添付PDF参照)
- 但し、写真展開催が決まった地域の強制連行に関する写真を補足する予定です。
7月18日(東日本集会) 横須賀:地下壕等
10月17日(関西集会) 兵庫「朝鮮國獨立」の文字が刻まれた甲陽園の地下トンネル等
*その他の地域でも開催地に合わせた写真を可能な限り補充する予定ですので遅くとも開催10日前までにお知らせ下さい。

2.展示形式

全ての写真は額縁に入っています。(サイズ 50cm×38cm)

- ギャラリー形式。(額は紐で壁に掛けるか、つり下げる)
- 一般展示。(会館のロビー等では三脚の上に立てることも可能です)
*写真と共に三脚(イーゼル)をお送りします。(イーゼル必要と連絡して下さい。額縁と同数のイーゼルをお送りします。) 右の写真。



3.利用料金

- 1日、3000円(但し、最低2日以上。3日以上は1日2000円。)
- 送料は全額主催者負担となります。(作成に約20万円かかりましたのでご協力よろしく)東京から着払いで発送します。返送は利用者負担でお願いします。
おおよそ往復で1万円前後です。東京に車で取りに来られる方は送料半額です。

4.準備と取り扱いについて

- 遅くとも開催の前日に到着するようにお送りします。
- 三脚(イーゼル)の組み立ては簡単ですが慌てると間違えてプラスチックの留め金の破損等につながりますので十分ご注意願います。
- 額の取り付けは全面部分が「ガラス」となっていますので手袋等で指紋が付かないように注意して下さい。

5.連絡

歴史人権週間事務局 金珍英(キム・ジニョン) jinyon529@yahoo.co.jp
東京都千代田区富士見2-15-15 朝鮮会館内 TEL03-3262-7111 FAX03-3262-7110
携帯080-5491-8906

フォトジャーナリスト 伊藤孝司写真展

『戦争と日本』

長年にわたり、日本の「過去」と「現在」をアジアの民衆の視点からとらえたいとの思いで取材してきました。

「過去」は、日本が行った植民地支配・戦争によって被害を受けたアジアの人々。

「現在」は日本がおこなっている日本国内やアジア諸国などでの大規模な環境破壊です。

写真と文章を雑誌に載せ、ビデオ映像をテレビ局の特集として放送するのが私の仕事です。(伊藤孝司ホームページより)

写真集と著書：『写真記録原爆棄民』ほるぷ出版, 1987.10 『長良川の一日』山と溪谷社, 1989.9. 『写真記録樺太棄民』ほるぷ出版, 1991.8. 『<証言>従軍慰安婦・女子勤労挺身隊』風媒社, 1992.8. 『破られた沈黙』風媒社, 1993.7. 『棄てられた皇軍』影書房, 1995.8. 『日本人花嫁の戦後』LYU 工房, 1995.8. 『日本人花嫁の戦後』新版.LYU 工房, 1996.7. 『台湾への原発輸出』・『アジアの戦争被害者たち』草の根出版会, 1997.4. 風媒社, 2000.1. 2000.4. 『平壤からの告発』風媒社, 2001.7. 『平壤からの告発. 続』風媒社, 2002.10. 『地球を殺すな!』風媒社, 2004.11 『日本が破壊する世界遺産』風媒社, 2000.4.



●日本軍性奴隷（日本軍「慰安婦」）



朴英深 (パク・ヨンシム)
1921年生まれ「ビルマ
へ連行され、次に中国
雲南省拉孟の「慰安
所」へ連行されました。
ここで中国軍の捕虜に

なり、米軍に写真を撮られました。妊娠してお腹が大きい女性
が私です」(撮影地＝朝鮮民主主義人民共和国・平壤市)



金学順 (キム・ハクスン)
1924年生まれ「『慰
安婦』をさせられたこと
はいつも胸に中にあり
ました。どれほど泣いた
かわかりません。死ぬ

前にこの体験を暴露して、スッとした気持ちになりたかったので
名乗り出ました」(撮影地＝韓国・ソウル市)



ユ・善玉 (ユ・ソンオク) 1923年生
まれ「中国東北地方の「慰安所」で
妊娠してしまい、軍医に子宮ごと胎
児を取り出されたんです。子供を産
めなくした日本に、復讐するこ
とばかり考えて生きてきました」
(撮影地＝朝鮮民主主義人民共
和国・平壤市)



姜徳景 (カン・ドクキ
ョン) 1929年生まれ
「富山県の「不二越」
で、食事があまりにも
少なくて寮から逃げ出
したんです。運悪く憲

兵に捕まり、長野県松代にあった「慰安所」へ連れて行かれて
兵隊たちの相手をさせられました」(撮影地＝韓国・ソウ
ル市)



クリスティタ・アルコベル 1926年生まれ
「30人の女性が日本軍に、昼間は飛行場建設の重労働、夜は屋外で兵隊の相手をさせられました。死んだ方がましと思ったものの、見張りがいるために出来なかったんです」(撮影地=フィリピン・マニラ)

死んだ方がましと思ったものの、見張りがいるために出来なかったんです」(撮影地=フィリピン・マニラ)



日本軍に性的被害を受けたインドネシアの女性たち。朝鮮民主主義人民共和国・大韓民国・中国・台湾・フィリピン・インドネシア

から多くの被害女性が勇気をもって名乗り出たが、日本政府は補償を拒否している。(撮影地=インドネシア・スカブミ)



パラピ・アニカ 1921年生まれ「夫が兵隊に行った後、香港にあった日本軍9322部隊の『慰安所』へ送られました。戦後、その被害体験は夫にも話すことができませんでした。日本軍から受けた心の痛みは忘れません」(撮影地=台湾・高雄県)

●現存する「慰安所」跡

朝鮮民主主義人民共和国の北端の芳津(パンジン)には、日本海軍「慰安所」が残っている。建物は、入った所に待合室があり、廊下の両側に同じ大きさの小部屋が並ぶという構造になっている。(撮影地=朝鮮民主主義人民共和国・咸鏡北道)



撮影地=朝鮮民主主義人民共和国・咸鏡北道)

日本軍「慰安所」(フィリピン)



マリア・ロサ・ヘンソンさんが、日本兵の相手をさせられた部屋。日本軍は大地主の豪邸を接收し、ベッドがいくつも並ぶ寝室をそのまま「慰安所」として使用した。(撮影地=フィリピン・アンジェルス市)

まま「慰安所」として使用した。(撮影地=フィリピン・アンジェルス市)

日本軍「慰安所」(香港)



香港の、「慰安所」として使われた建物。香港を占領した日本軍は街の一部を接收し、その中に「慰安所」を設けた。日本軍はあらゆる占領地に「慰安所」を設け、朝鮮人女性をはるばると連れて行った。(撮影地=香港・湾仔)

●もはや日本に戻れない韓国の日本人女性（慶州ナザレ園）



韓国の古都・慶州（キョンジュ）には、身寄りのない日本人女性のための施設「慶州ナザレ園」がある。韓国で暮す日本人女性のほとんどは永住

帰国を断念しており、「ナザレ園」を最後の拠りどころとしている。（撮影地＝韓国・慶州市）



慶州の春は桜の花で埋め尽くされる。「ナザレ園」からも花見に行く。日本が朝鮮を植民地支配した結果、多くの日本人女性が

韓国で暮らすことになり、もはや日本への帰国は困難になった。「日本」を心の拠りどころにしながら暮す日本人女性たちは次々と亡くなっている。（撮影地＝韓国・慶州市）

いつも元気な岩崎みつえさん。1945年12月に玄界灘を越え、夫の故郷である扶餘



（ブヨ）へ来た。「日本へ帰ってしまえ！」と夫の妹にいつも怒鳴られながら、体の不自由なその妹の一切の身の回りの世話をしてきた。

「死のうと思ひ、子どもを背負って水に入ろうとしたことが何回もありました。「ナザレ園」へ来てからは、もう楽しくて」。（撮影地＝韓国・慶州市）

慶州ナザレ園：韓国慶州市にある施設。朝鮮植民地期、日本はさまざまな同化政策を行った。その一つが「内鮮結婚」である。日本政府が、日本人と朝鮮人の結婚を奨励した。戦後、朝鮮半島に残された日本人女性の一時避難を目的として設置されたが、日本に身請け人のいない日本人女性達が帰国できずに施設に残り、やがて養老院の体を成していった。1972年10月、社会福祉法人の認可を受け入居が始まった。設立に関わったのは日本で擁護老人ホームを経営する菊池政一と韓国老人施設協会の会長金龍成である。（Wikipedia 等より抜粋）。

●太平丸と浮島丸



黄宗洙（ファン・チョン ス） 1926年生まれ
「朝鮮人の軍属1000人が小樽で『太平丸』に乗せられました。目的地の北千島パラ

ムシル島の近くで、米軍の潜水艦に2発の魚雷で沈められたんです」（撮影地・朝鮮民主主義人民共和国・平壤市）



朴載夏（パク・チェハ） 1923年生まれ「乗っていた『浮島丸』は釜山へ向かっていました。陸地が見えるのでおかしいと思っていたら爆発

しました。韓国へ行って報復を受けたくない日本人船員が、わざと爆破したんです」（撮影地＝韓国・忠清北道）

被爆



長崎の「三菱造船所」へ連行された朝鮮人たちが収容された「木鉢寮」。原爆による爆風と熱線が山にさえぎられたため、建物は倒壊を

まぬがれた。この強制連行の証人は、取り壊されてしまって今はない。（撮影地＝日本・長崎市）



鄭大一（チョン・テイ ル） 1934年生まれ「広島市にあった自宅近くで被爆しました。一緒にいた従兄弟はその日の夜に亡くなったん

です。私はひどい火傷をしましたが、治療といってもジャガイモジャガイモの汁を塗っただけでした」（撮影地＝大韓民国・群山市）



朝鮮民主主義人民共和国の首都・平壤(ピョンヤン)で暮す李桂先(リ・ケソン)さん。彼女の両手には、指ごとに包帯が巻かれていた。「どういうわけか指の皮がしょっちゅう剥がれ、薬を塗って包帯しないと血がにじむんです」と語る。指ばかりでなく、子どもの頃から消化器の病にも苦しみ続けてきた。

李桂先さんが、自分の健康を蝕んできた原因を知ったのは2004年。広島から訪ねて来た母親は、病に苦しむ娘を見て広島市で被爆していることを告げた。被爆から59年。それまで母親が黙っていたのには、深い理由があった。

李さんの苦しみと怒り、日本政府に放置され続けてきた在朝被爆者たちの実態、動き始めた在朝被爆者支援……。この映画は、朝鮮民主主義人民共和国での何度もの撮影でそれを明らかにする。

●日本国内に連行され



崔翼天(チェ・イクチョン) 1923年生まれ「愛知県の『中島飛行機半田製作所』では、海軍機の組み立てをしました。誰かが仕事をしくじると、小隊30人全員が力いっぱい棒で叩かれました」。(撮影地＝朝鮮民主主義人民共和国・咸興市で妻と)



青森県風間浦村に残る「焼山ずい道」。建設作業をしたのは、強制的に連行されてきた朝鮮人たちだった。



青森県大畑町の「二枚橋」。下北半島北端の大間町まで兵士や軍需物資を運搬するため、朝鮮人の強制労働によって

鉄道建設がおこなわれた。